

三人の小僧どもはこれを知って何とかもちを食いたいと思案し、一つの計を思いついたんだとお。一人の小僧は「おれの名前はフーフーということにしよう。」他二人の小僧は「おれたちはハタハタとする。」と決め、さてその晩になっていつものように眠ったふりをしていて、坊さんはコッソリ戸棚からもちをとり出して灰のなかにくべて食べようとしたんだとお。そしてやがて焼けたもちを灰のなかからとり出して、熱いので「フーフー」とさすりながら息をかけてさまそうとすると、小僧がとび出してきて「おしよさま、およびでしようか。わたしは『フーフー』と名前を変えました。」と、手をついたんだとお。坊さんが次に炉ぶちでもちの灰を落そうと、ハタハタたたくと他の二人がとび出してきて「おしよさま、およびですか。わたしどもは『ハタハタ』と名前を変えました。」と手をついたんだとお。坊さんは「さては、はかられたか。小僧どもにもわけてやらねばならぬわい。」と小僧どもにもおすそわけしてやったんだとお。

## 二人の坊さんのはなし

むかし、わらじばきの坊さんが二人墨染の衣をひるがえし、編みがさに鉄鉢を片手にして、たくはつに出かけていたんだとお。大きな川にさしかかった。橋がなかったので、川をこえて向こう岸に渡ることになったとお。ところがそこにはたいへんきれいな女の人が旅装束でやってきて困りきっている様子。それで一人の若い坊さんが「さあわたしの肩に乗りなさい。向こう岸まで送って進ぜよう。」と申し出たそうなの。女の人は「ありがとうございます。」と礼をいって、若い坊さんにおぶさって向こう岸にたどりつき、いんぎんに礼をいって去ったとお。ところが他の坊さんはしばらく歩いて行ってから、カンカンに怒って「女人なんかけがらわしい。きさまはそんな女をおんぶして何とも思わないのか。女人にふれるのは憎りよには禁制なんだぞ。」